

祈りなきゆふぐれの声も澄みゆかむジェット気流は秋を吹きゆく

川よわが時間のごとし おもふことかなはねば焚く芝草の土手

愚者やわれまぼろしよりもほのかなる学の夢ふたびを見はじむ

菊に立つほのほは直く立つものを秋空よわれはほほえみをらむ

問はるればただ人間でありたしと答へむに 夜は鈴虫の乱

影法師霜の狭庭にはりつきぬふためきて昨夜は迷宮にありき

いつまでも拙速の蟻見えながらアカデミアよわが混沌の庭

美女に答わたしてそよそよとこころは遊ぶ乱流の岸

まなこほのかに焦点のなき夜に入りてああ笑ふべし雲の崖

そよ夢は時計台の上にごほりつつドン・キホーテに黄金の髭生ゆ

銀河よりこぼれしものと呑みそめし剣菱よあとは蛇にでも聞け

鐘楼やそのかみひとは髪ほどき愛よりも濃き日々へさそひき

孤独また花といはむかももいろの蛇ばかりわがめぐりを歩む

漏刻にかなしみの水ほろびつつひと帰すべしすみれ咲く家

飛ぶ一生這ふ一生われら鷲と蛇の別れをくるしみてなす

かつて愛と呼びしもの天をきしませて春三月の雪はさまよふ

忘れられてオルフェの琴の鳴ることし氷をいづる朝の水沫は

愛のことは わがふりあふぐつくよみの春ならねども輪郭あはし

子は影を踏まんと走り妻も走りあわれはただ余白のごとし

草原よ銀のサタンはうちふすと一生のごとく一日は暮る

かつてわれどこまでも勝たむところありき鷲は鳴く春の寒さに

われとひとと声あげず消す野火のうへけふの鳥みなあをくとびかふ

くるくると蝸牛は雨にあそびをりあををとただ一書生なり

わが長子天道虫の翅つけてぶんぶんと母追ひかけまはす

砂丘すなをかに立ちておもへりたまきはる世界終末にあふはわが子が
はりがねの麒麟はわれを飾るべくひかり鈍しもまだねむられず
CGのごとくかはゆき歌つくり百人をなぐり夢疲れせり
脳のなかとぶ熱砂こそおもほゆれたそがれのラボにめざめてわれは
いつしらにキーの湾曲としたしみて春となりけりこの端末も
業房は長方形のかさなりに楕円なるわれが入りゆくところ
研究リサーチはサディズムのごと人打つと悲しみにけり教授夫人は
春画狂ひの博士をあまた棲まはせてインターネットじゆくじゆくと延ぶ
春の部屋 ああさつきから俱利伽羅の女がわれをむさぼり食らふ
縄文をとこ弥生をんなを盗むとき世紀うつるふかをりたちけむ
ニュートンの林檎のごとき単純に愛すれどなぜか複雑になる
暮れはてて薔薇のをみなをおもひをり肺胞の酸素見つむることく
賢者なく英雄のなき世の果てへ彗星はゆくながき尾をもて
わが胸よケルベロスのごと乱るるを日のひかりあまき世紀末なり
霧島は春をひらきそむ花の裡にさやさやと蜜の雨は降りそむ
あはき濃きくまぐまや朝の霞より鷺たてばみゆ荒草の針
天涯といふはいかなる崖せきや空蝉の目に雨はふりつつ
ふうはりと螢あそばせひとわらふその夫つまはつひの漂流者なり
闇のなか石筍のごとく乳房立ちて蛙・蛤けら・蛟みづぢともどもにあそぶ
ひしひしと沈黙が胸つぶすともわが悪魔の尾ひとに知らゆな
ゆふもやのほころびを出づる虹見えて球場の声はるけくなりぬ
自動車の車輪はまはるその中に鎖されし空気まはりあるなり
荒物屋の大盥じんと光あり過ぎきておもふあづま空梅雨
鍵させば震ふセダンよその内に古代生物が燃えてあるなり
エンジンの密室に火は生まれ消ゆああことばなき時の片々

あかきあをき金属光の飛ぶ見えてインターネットはたちまち狂ふ
ハツカーとファツカーの間さまよはむWW少年ゆるゆる太る

とめどなく問はず語りの湧きやまぬホームページに目つむりてわれは
おそなつのあらくさの波 漕ぎいでて蠮螋乙女は金の袖ふる

蠮螋のあそびやまぬは草の国 おぼつかかな人の国なるわれら

DNA葛なしつつなだるといまかぎりなき少年少女

鳴りいでて神はさびしき鞭となり ああもうやめよ蒼古の比喻は

しろがねはさびしきに今宵しろがねの袈裟着たくなり部屋にこもりぬ

蟹を喰ひまた蟹を喰ふ文机のうそさむきかな妻も子もあらぬ

食終へし大皿は顔となりて冷ゆその極彩ぞ壮年ならむ

ニユーロンの樹状突起がうちふしてまたたちあがるためらひは見よ

音もなく空が家族をおそふこと知るといへども言はむすべなし

ゆふだちのカオス・エッジをとびめぐり蜻蛉どもの紺はしたたる

ああなにも考ふるなと木がさわぐ木はとことはの旅人となり

世界樹が繁るすなはち焼け落つる夢ばかりなりこの千年紀

国家と性TPOなくもつれあふC・チャプリンに弘兼憲史に

ドルはなほ世界押し流す力あり力とは情かなしますもの

むらさきの光の腕をさしのばし東京がわれを吊しにくるぞ

うすやみの泥たちあがり父となるこの秘密子に知らるるなかれ

かたむきて空中に立つ鯨よと告げやらむ 父 を問へるこの子に

勝敗がなべてとならむゆふぐれを父もあゆみきなにもかはらぬ

ひとは何度初雪といふものを見むゆふぐれの子が空を見てゐる

ブラックホールおのづから電波出すといふさやさやとながき恋のごときか

三日月は裂傷のごと空なるを夜々に濃くなるわが影法師

もうなにもなき柿の枝柿の空ばつくりといま剖かれてゆく

遊べ遊べひとよなかばの百舌の声降るぞ真白き雪も降るなり
つひの敵ひそかに恋ふはとほつ野にただやみがたき粉雪がゆゑ
水鳥のうたふごときはよそに見きもう誰も何も言つてはくれぬ
悪評が年の瀬わたりしばらくはさざなみが濺をはこぶざわめき
メタリックにことは死ゆくを白秋よ大正元年のきみは知らざりき
われはあるとき群青ふかき庭先にやぶれ簾をかかへてわらふ
静謐なるへブライ語ありてをとめらがその父を知る夜も伝へき
ウルトラマンは裸なのかと子が問へり湯気うすくなるミルクの前に
子は蒔けりジャックの種子を われはもう見守りもせぬはつなつの部屋
擧立つは人立つよりもすがしきに子とのぼりきて街を見下ろす
死は平衡を賜ふといひける科学者のふたたびみたびうすわらひすも
落つれども蜻蛉やんまに將のまなこあり飛ぶことのなき時を濃くせむ
夏祭りきりきりと人を押し流しああ貧のなき奈落かここは
アンタレス子午線にかかるとき生ける虫みな蜜欲りて飛ぶ
三千年あまた書生を焼きし火ぞわれのそがひにゆらゆらとある
手花火は柳となれりその刹那われの死ぬ日を子は尋ねをり
石、花のごとく崩れて誰かとなふ殷・周・秦・漢ほるべほるべと
かぶと虫飢ゑて死ゆくはあさぼらけ祭礼のごとし子の夏休み
唐辛子くれなる頭でど自負つよく実るもの秋は滅ぼしやまず
をとこへし花うしなひし草ばかり舞へど狂へど枯れゆく日本
関八州悪党となり駆けめぐる 科学とはいはばさういふこころ
Pentium にバグがあった
ミクロンの虫ほるほろり体内に鳴くはかなしゑ夜のペンティアム
「二〇一〇年、脳コンピュータはあるでしょうか？」 青年よ世界があるかまづ問
へ
鈴屋に鈴老ゆるこのしづけさを憎むとき都市は狂ひゆくらむ

ことは率^るて思想率ざりしあかるさよああ新世紀来^こざらむごとし
鯨鯨の吊らるる待ちて火をたけばああわれはただ夕闇の澱^{おひ}
ひたひたと緑青の噴きいづるまで父なるものはわれを見つむる
なぜ俺を捨てて東京へゆくのかと夕森が問ふ早足にゆけば
工学はしづかな愛技 わが指の老いゆくもときに蜜を生^あれしむ
クワガタは越冬をすと子が言へば思ふなり子に幾度来る冬

デルタ
から イブシロン
へ会議たゆたへば永遠のごと眠たくなりぬ

をのきて恋ぐるひなす名人のかすかに親し朝の鏡よ

わが見るはアルキメデスの夢ならず妻眠る部屋しづかに出でぬ

結語打てぬ「工学の未来」けふもまたひとひうつるふつれづれのごと

シリウス星系アルファ・ケンタウリ うたびとはさむくちひさくはてしなきもの

楓の蜜すくひては落とすあさぼらけボルツマンの死をわが反芻す

女人^{にょにん}おそふは女人抱くよりたはやすくスメルジャコフはかなしきわが子

おもひびと姉となしつつ老いゆきしゲートの知恵はかがやきそめつ